へぇ～そおけぇ～

■曽於の伝説・民話　其ノ二十六

「山頭火句碑他」

先人の足跡は、我達への贈物である。

漂泊の俳人種田山頭火の句碑が、末吉駅跡地に建っている。

年とればふるさと
こひしいつくつくぼうし

昭和五年十月十二日に、岩川から末吉を行乞（托鉢のこと）した際に作られた。鹿児島県内は、オマワリさんが厳しいとか、焼酎の匂いがきつすぎるというので、わずかに志布志と当地しか足を踏み入れていない。他にもう一句残している。

捨て、ある
扇子をひらけば　不二の山

という句で、捨てられたもの、見向かれないものに目を向けている。

文学碑を他に見ると、高木秀吉の詩碑が、市役所隣向江公園内にある。

閑けさにたえきれないで
ほうせん花の実ははじけるのです

この詩は、昭和六年六月一日発行の『詩集　端座』に掲載されている。第一詩集『月と樹木』（大正十五年五月十日発行）には、若き内面の詩が多い。

答
沈黙の答　みづからに
いくたび加へしことぞ

曽於市立図書館前に、山中隼人（貞則の歌号）の歌碑がある。

戦死せし友の臨終は
何處ならむ　甘蔗の穂
並みに風渡るのみ

戦死した同級生を、沖縄訪問の際に詠んだものである。『昭和萬葉集』にも一首採用されている。

いささかの愛惜を断ち
焚き捨つる
万葉代匠記の炎よ赤し

戦時中に、私物をすべて処分せよとの命令が出された時のものである。平岡深の歌碑が、高之峯山頂にある。

生る、ものたくましきかな
高之峯の落花の中に
もゆるさわらび

島津忠恒の歌碑が、住吉神社二の鳥居隣にある。慶長五年（一六〇〇）四月十一日に庄内の乱鎮定を記念し、参詣した際に詠まれた。

行末もいまそしらる、
くに、の
あまつ御神の
めぐミある世ハ

画伯吉井淳二は、島崎藤村の息鶏二と画学校が一緒で、その縁で藤村は吉井の個展に推薦文を寄せている。それが『画帖の栞』〈21〉に紹介されており、交流の軌跡がわかる。

山頭火が来た昭和五年、考古学者鳥居龍蔵が、住吉山の「姥石」を調査している。

文化人の足跡は、故郷に知的な刺激を大きく残し、伝説として語られることが多い。